

## 序

私たちグループのメンバー8人は、世界の貧困を考えるというテーマのもとに、話し合ってきた。話題にした国々は、フィリピン、パプアニューギニア、アフリカ等である。題材に用いたものは、新聞の記事、貧困に関する講演会と貧困の国々に生活した2、3人のメンバーの体験談であった。

このグループで話し合っていくうちに、改めて、どうしてこのような貧しい国が生まれるのかという疑問を持った。次に、貧しい国にも、古くから文明が発達し、繁栄した時代があったのに、歴史的にみて、民族間の争い、宗教間の争い、政治的争い、そして気候風土の悪条件も重なって、貧困に陥ったのではないかと考えた。

しかしながら、貧しい国々の人々を理解する為に、一番良い策は、実際にその国に行き、生活してみなくてはわからないと、メンバーの一人は、述べている。彼女の奉仕活動の拠点は、バングラデシュの首都Dhakaから南へ130km程に位置するNarayanpur村である。この村での彼女の活動期間は2000年より現在に至るまでである。彼女が奉仕活動の団体Sakura・Mohilaを立ち上げたのは、20数年前に駐日バングラデシュ大使に、彼の親戚筋のNarayanpur村への援助を強く請われたことに発する。

彼女は、まず、その村の小学校を白いコンクリート造りの校舎にするため、バザーで資金を集めて完成させた。又Sakura<sup>注1</sup>・Mohila<sup>注2</sup>・Shomity<sup>注3</sup>という互助会を作ることで、この村の女性の自立に貢献している。次の報告は、彼女自身の現場からのレポートであるので、ご一読願いたい。

注1. Sakura (日本語 cherry tree)

注2. Mohila(ベンガル語 woman)

注3. Shomity(ベンガル語 Mutual Aid Association)

## 社会の貧困についてのスタディー バングラデシュ・ナラヤンプル村のプロジェクトから 10年の活動の経過から見た貧困

**概要：**2000年から、校舎建設、教師の雇用と始まった「サクラ・モヒラ」のプロジェクトは、音楽、絵画の教室、「土地、家、夫のない」最貧層の女性27人のマイクロクレジット・システムを応用した互助会、ミシンと仕事場を借りての若い女性を対象の縫製チームへと10年間に次第に拡大していった。現在さらに、大学生2人、高校生1人、小学生6人に奨学金を出し、小学生には制服、栄養を取るためのビスケットを支給している。

このプロジェクトの資金を支えているのは、現地企業とのビジネスである。バングラデシュの手織りのシルク、綿を使い、伝統的な手仕事を取り入れた服（デザイン・パターンは日本）、バングラデシュの特産である牛革の製品（デザインは日本が提供）を日本でマーケットし、その利益が村の開発資金である。現地企業は、子どもの労働者を使わない企業を条件とし、企業の輸出と伝統の技術を残すことを旨としている。

### 貧困について

#### a) 村の生活から

##### 小学校



村の中でお金があるとしたら、それは家族のだれかが外国に働きに出ている人だ。10年前にはトタンや竹棒の家が主だった集落に、立派な壁の家ができて、聞いてみるとシンガポールに行ってお金を稼いだとか、サウジアラビアに出稼ぎに行ったとかいう話である。村には仕事がない。外国へ行くお金のない男たちは都会へ出稼ぎに行く。子どもたちは無邪気な様子で写っているけれど、10歳前後で都会の家に住み込みで働きに行く子も多い。筆者は年に少なくとも2回は村を訪問するけれど、同じ顔を見るのは数人に限られる。

村の学校にはコンピューターはおろか電気さえもない。本も買えないから、こちらが子ど

もに買ってあげたわずかばかりの本は、本棚の中に入り、村では一番立派な鍵がかけられている。子どもたちは教育もないまま、無防備で社会に出て行かなければならない。そして行きつく先は、家庭内での手伝いか縫製工場の縫い子などである。彼らは自信がないから、物怖じすることが多く、必要な教育も受けていないので社会の中で、不利なサイクルを脱するのは至難のことである。栄養状態も悪いので、都会の子どもに比べ体格も劣り、知能の発育面でも遅れを取る例がある。病気になると、自然治癒が無理だと分った段階で、民間療法に頼ることになる。従って、生存率も低い。本を買ってあげようと思ったら、「村の子どもたちはお腹を空かせているので食べ物のほうがよい」という提案が村からあって、現在はビスケットをお土産にしている。どこからかビスケットの出る日の情報を耳にして、学校の区域外の子もビスケットをもらう列に連なるそう。それで、ビスケットは、どこから集まってくる子どもたちのために 100 人分を余分に準備することになっている。どのような夢をかかえてビスケットのために遠い道りをやってくるのだろうか？

物質的な貧しさの中で、4 年目になる絵画の教室の絵は、試行錯誤の末に表現力が格段に豊かになった。教材も安価なものだが支給されるので、心配なくクレヨンを使い、力強い表現力である。音楽は少しずつ楽器を弾く子も増えているが、毎回、同じことの繰り返しで、新しい曲がはいらない。そのようなことができる教師がいないのだ。教育は本来村の有志者がしてもいいと思うが、村人は自分たちの子どもの教育にすら、お金を払わないとだれも動かない。

ただし、10 年の活動の中育った、大学生の奨学生が、「村の子どもの面倒は自分たちが引き受けると」言ってくれた。彼らの中で、日本に対する憧れは大きく育ち、日本語を習い、日本のために何かをしたいと考えるようになっていく。これは、計画外の副産物であり、自分の乏しい能力が豊かな果実で報われたように感じていることである。

バングラデシュは、中国からの生産をシフトする生産場所として、有力候補の国である。若い労働力があふれているのに、国の非雇用率は 40% である。現在労働力の質は低く、それゆえに安い、外部からの資本により、やがては村の子どもたちもビジネスのサイクルに、使い捨ての労働力として組み込まれていくことだろう。

### 「土地・家・夫のない女性たち」…サクラ・モヒラ・ショミティ

「土地、家、夫のない」女性たちは共同のトイレを使う。集落の中に彼女たちの専用のトイレがある。そのような生活の中で 8 年前から始めたマイクロクレジット・システムの応用で、彼女たちは、サクラ・モヒラが雇用するリーダーを介し、必要に応じてお金を借り、返している。苗、山羊、牛などを購入したり、小さなトタンのお店を持ったりして、現在返済率は 100% である。ただし利息も 3% と破格の低さである。だが、この小さな資金により彼女たちは高金利で他の人からお金を借りることがなくなり、安心を得ることができた。実施から 8 年目に入り、このシステムは彼女たちの生活に溶け込み、がんばってま

で独立しようと思わなくなった。シードマネーは返さなくてもよい、と考えたいお金になっている。3%の利息でさえ、自分たちのお金と考えるようになっており、この依存性を断ち切ることが現在の課題となっている。

また別のプロジェクトとして、若い女性を対象に、トタンの家を仕事場として借り、リーダー、教師を雇用して、ミシンを4台買い入れ、縫製チームを作っている。ほとんどが15～16歳のティーンエイジャーで、20歳前に結婚してしまう。仕事の技術習得は乏しいが、現金収入はありがたいらしく、もっと仕事を欲しがれるけれど、村の縫製教師にして基礎知識がないために、日本の市場にかなうレベルの製品ができず、仕事を増やせないというサイクルの繰り返りで、発展できない現状である。仕事場には薄暗い電球、カッティング用のテーブル、ミシン4台がある。日本の市場用の基準をこの環境の中の彼女たちに期待するのも無理かもしれない。では、どうやって窮状を乗り切るのか。自分たちのために努力を尽くそうという意欲は乏しく、そのように考えるに至る教育がない。富裕層の婦人たちには時間があるが、自分の家族や親戚、友人の範囲内に関心が留まり、彼女たちのあまった時間とお金は、外国人が汗しているのを見据えながら、自国の村の女性たちの教育や啓蒙に向けられることはまれである。だが、自分の財産と時間を国のためにささげている女性も数人いて、それはバングラデシュの現状の中で、胸を打つ姿である。華美ではないが、立派さのオーラがひしひしと伝わってくる。

サクラ・モヒラの10年目の節目に記念のツアーを計画したら、3人の日本婦人が参加してこの村を訪れた。この3人の婦人たちは、上に書き記した貧しい村を訪問し、「貧しさ」を実感したのだろうか？豊かさを感じたのだろうか？実際には、村の子ども、大人たちの、素朴ながら精一杯の歓迎の中で、皆、心がいっぱい満たされ、豊かな感情に満たされたように思われる。この体験は日本の中で、語られることが少ない。語る言葉は意図しない方向で理解され、ほんとのことが言葉を通して伝わらず、先入観で捉えられてしまうのだ。

サクラ・モヒラが主に生産を依頼する企業は二つある。大企業とは言え、縫製の技術は遅れている。仮にトップに立つ人たちは理解できても、縫い子の教育レベルが低く、そこで品質が落ちる。だが伝統的な手仕事は見事な出来栄である。バングラデシュの主流である綿や絹の織物は手織りが主である。村の木立の中で手織りの職人が土に穴を掘りそこに座して織る、という基盤の上に布の産業が成立している。機械を一台入れると10人の職人が失職するそうだ。このような現状を基準が低い、とか教育レベルが低い、とか、お金のある先進国の人たちは自由気ままに批評するけれど、じっくりと味わうと手織り布は機械織りでは出せない温もりがある。土に座して職人が織る綿も絹も日向の匂いがして、素朴な気持ちよさがある。職人たちは長い時間仕事をして、支払われる金額はわずかである。それゆえ質素な生活を強いられる。職人たちがそれを貧しさと考えたとしたら、彼らは子どもの教育ができず、病気になっても医者にかかれぬという意味である。本物の

職人たちなら、生産するということがプライドであり、喜びである。彼らは良いものを生産したいに違いない。

国際見本市で、バングラデシュの企業に手伝いをしていて、わかったことだが、バングラデシュに、先進国が注文するのは「コピー」である。生産コストの安い国にコピー製品を造らせ、仕上げを先進国でして、ラベルの中に貧困国のマイナスイメージを閉じ込めてしまう。消費者が高級イメージを求めるからである。私たちの知らないところで、バングラデシュが製品の中に入り込み、「これは超ブランドだ！」と満足している輩もいるかもしれない。大枚と引き換えに。

「初めは貧しい人のために協力してほしい」と頼まれて入ったナラヤンプル村であるが、正直な話、資金を作る活動はかなりの労力と精神力を要求する。初めの理想に燃えた情熱は現実の厳しさの中で、村人や労働者に対する怒りや苛立ちに代わることがほとんどである。それでもなお、ふと彼らに会いたくなるのはなぜだろう。なぜ10年も続けているのだろう。ひょっとしたら無意識のうちに、日本の生活の基準で優劣を測り、上からの目線でバングラデシュのあれこれを決め付けていないだろうか。お金を提供していることをいいことに、自分の基準を押し付けていないだろうか。人のお金に頼り十分な努力を怠ることも貧しいが、自分の苦勞を思い、それに値する達成だけをよし、とするのも少し貧しいかもしれない。ああでもない、こうでもない、と行き来しながら、バングラデシュのために使ったお金の達成感は得られないにしても、サクラ・モヒラの活動を通して、身にあまる人たちとの知己を得たのも事実である。

もっと多くの日本の人たちをナラヤンプル村に連れていったらどうだろう。ナラヤンプル村の人たちを日本に連れてきたらどうだろう。行ったり、来たり、の人間の交流の中で生まれるものはあるだろうか？金持ちの国は迷惑に思うのだろうか。貧乏な村人は肩身が狭く、息苦しい思いに苦しむのだろうか？便利な生活に心を奪われて、故里を捨ててしまうのだろうか。貧困に対する答えはないが、克服に向けて試行錯誤を繰り返す中で、思わぬ恵みを頂戴するものだ。貧困と富裕は背中合わせである。同じことをしていながら、貧しくもなれるし、豊かにもなれる。自分の生活を生きるのは自分であることを思いながら、与えられた生活を精一杯に生きることしか、解決に至る道はなさそうである。

## 終わりに

現地に入って活動をすることは、皆ができることではない。彼女は10年前にバングラシュに行った時は、その貧しさに驚いたと言っていた。しかし、今は逆に、その感覚はまるでないとのことである。又10年の間に、現地の人々との深いつながりができたので、行くと帰りたくなくなるそうだ。このことは、彼女が現地の生活に同化してきたことを意味している気がする。このように、同化しながらの奉仕と援助は、理想的な姿だと思う。

この二年間の勉強会で、真の援助とは何かを考えさせられた。学校を建てる等、金銭的な援助も必要であるが、その後続く、人々が自立した生計をたてるには、どうしたら良いかということ、そこまで考えて「援助」と言えるのではないだろうか。

又彼女が村の子供達や女性の埋もれていた感性を表現できる場面を提供したことは貴重なことだと思う。その結果、絵画教室で、子供達が素朴な絵を描くことができ、女性は、伝統的手織りの仕事を行い、機械織りでは感じ得ないぬくもりを手織り布に表している。

最後に、私たちメンバーは、彼女の報告を聞いて、貧困国に対して、ただ、見ているだけではなく、実践的に何かしなければならぬという気持ちを強くもった。又この国の貧困は、他の国々の貧困と共通する面もあると思う。私たちにできることは、第一に貧困の情報を正しく得ること、第二にそのことを身近な人々に伝えていくことが、大切と思った。それが、関心をもつ人の輪を広げることになると思う。私たちは、直接かかわることができれば、その姿勢を大事にし、またできない場合は、間接的にでも、関心を持ち続け、奉仕の心を持って、援助の実現に向けて努力していきたい。